

日本語と中国語の限定とりたて表現の解釈曖昧性と焦点移動¹

The Structural Ambiguity and Focus Shifting in Restrictive Focus Expressions in Japanese and Chinese

李 哲
Li Zhe

This article analyzes the structural ambiguity and focus shifting in restrictive focus expressions in Japanese and Chinese. Although both languages are characterized by structural ambiguity, Chinese tends to further allow multiple interpretations than Japanese. The position of Japanese restrictive focus particles is relatively free and consistent with the dominant word order, resulting in structural ambiguity. Conversely, the position of Chinese restrictive focus adverbs is relatively fixed and deviates from the dominant word order, causing multiple interpretations. Both languages are prone to exhibiting structural ambiguity when a sentence contains complex predicate elements. Most focus particles cannot shift focus, while Chinese sentences with restrictive focus adverbs generally allow focus shifting with multiple interpretations.

キーワード： 限定とりたて表現，曖昧性，焦点

Keywords: Restrictive focus expressions, Ambiguity, Focus

1. はじめに

本稿は、日本語と中国語における限定とりたて表現の解釈曖昧性と焦点移動について考察する。日本語記述文法研究会(編)(2009:3)によると、「とりたてとは文のある要素をきわだたせ、同類の要素との関係を背景にして、特別な意味を加えることである」。日本語記述文法研究会(編)(2009:45)では、限定とりたてとは、「文中のある要素をとりたて、その要素が唯一のものであることを示し、同類のほかのものを排除するという限定の意味を加えることである」と定義している。日本語のとりたて表現はとりたて助詞ととりたて副詞

¹ 本研究は中国教育部人文社会科学研究基金プロジェクト(21YJC740048)の研究成果の一部である。本稿の内容は「日中対照言語学研究会 2021 年 10 月例会」および「第 13 回日本語教育及び日本学研究国際シンポジウム (2021 年 11 月中国・同済大学)」における口頭発表に基づいたものである。

の形式で機能しており、限定とりたて助詞には「だけ」「しか」「ばかり」などがあり、限定とりたて副詞には「ただ」「単に」などがある。

中国語にはとりたてという文法概念はないが、日本語のとりたて表現に対応する表現は数多く存在する。本稿はそのようなとりたての機能を果たしている表現を「中国語とりたて表現」と呼ぶ。品詞からいえば、中国語の限定とりたて表現は、副詞として現れるのが一般的である。本稿はこれらの副詞を「限定とりたて副詞」と呼び、代表的な“只”“仅”“光”“净”を巡って考察を進めたい。

以下の内容では、日本語と中国語における限定とりたて表現の中で最も使用頻度が高い「だけ」と“只”を例にして問題の所在を説明する。例文におけるとりたて表現を太字にする。とりたてられる要素に下線をつける。

- (1) 私は太郎に 100 円 **だけ** あげた。
(2) 我 只 给 了 太郎 一百元 钱。
(1SG だけ あげる PST 太郎 100 元 金)
「私は太郎に **100 元** だけあげた」

例文(1)では、とりたて表現の「だけ」は「100 円」をとりたて、「太郎にあげた」お金の額はほかではなく、「100 円」に限られるという意味を付け足している。同時に、「100 円」の同類の要素、つまり、101 円以上のようなほかの金額ではないことも含意されている。例文(2)においても、中国語とりたて表現の“只”は限定の意味を表しており、文中のある要素の唯一性を示していると同時に、同類の他の要素が排除されている。

しかしながら、例文(2)における“只”のとりたてる要素について、二つの可能性がある。文脈や話者の意図によって、“太郎”も“一百元钱”も“只”のとりたてる対象に充てられるので、例文(2)は曖昧文であることが判定できる。“太郎”をとりたてる場合には排除されるのは“太郎”以外の人で、“一百元钱”をとりたてると排除されるのは“一百元”以外のほかの金額である。

それに対し、例文(1)における「だけ」のとりたてる対象は明確で、曖昧文ではないと考えられる。例文(1)と例文(2)を対照して見ると、同じ意味機能を表すとりたて表現の曖昧性における相違が見えてくる。従来の研究では、日中語の限定とりたて表現の曖昧性についての対照研究は、管見の限り、ほとんど見られない。本稿の目的は、日中語の限定とりたて表現の関連要素を考察することを通して、曖昧性の生じる原因及び曖昧文の解消方法を明らかにする。

本稿 2 節からの構成は以下の通りである。まず、「だけ」と“只”を例に、日中語の限定とりたて表現の文中における付加位置を考察する。次に、各表現の形式上の共起関係と

の関連性を研究する。それから、限定とりたて表現の焦点移動を分析する。最後は、曖昧性を解消する方法として、プロミネンスや対比焦点の構文補足をあげて考察する。

2. 付加位置と曖昧性

2.1 「だけ」の付加位置

「だけ」はとりたて助詞で、文中の広い範囲に分布するとされている。沼田善子(2009:17)は、「とりたて詞はその分布が、格助詞等ほかの語と比べて相対的に自由であることが、一つの特徴である」と指摘している。「だけ」の付加位置は、とりたて詞の一般的な特徴に従い、名詞や名詞句に付加する以外にも、格助詞や述語に対する後接としてもしばしば見られる。

例文(1)における「だけ」は目的語の「100円」をとりたてる。その「だけ」を文中で移動させ、各成分に付加させてみると、以下の例文(3)(4)(5)となる。

- (3) わたし**だけ**が太郎に100円あげた。(主語をとりたてる)
- (4) わたしは太郎に**だけ**100円あげた。(受け手をとりたてる)
- (5) わたしは太郎に100円あげた**だけ**だ。(文全体をとりたてる)

例文(3)の「だけ」は主語の「わたし」をとりたて、太郎にお金をあげた人は「わたし」に限られることを示している。ただし、このような場合では「だけ」の後に「が」を伴うのがほとんどである。例文(4)では、「だけ」が「太郎」を際立たせ、動作の受け手としての「太郎」が唯一の対象であることが含意されている。このような対象語に付加する場合は、格助詞「に」が省略できず、「対象語+に」に後接するのは自然である。例文(5)では、述語「あげた」の後ろに「だけ」が付加され、文全体をとりたてている。述語に後接する文では、「だけ」の後ろに「だ」を置く必要がある。

つまり、「だけ」の付加位置は相対的に自由で、様々な成分や要素に接続することができる。名詞や名詞句が充当する主語や目的語をとりたてることができるのは言うまでもなく、連用修飾成分や述語に後接する場合でも意味明確で自然な文を構築できる。

2.2 “只”の付加位置と曖昧性

井上優(2019:111)では、「中国語のとりたて表現について、副詞がとりたて表現として用いられる。とりたて副詞は主語と述語の間に置かれ、主に限定、極端、類似を表し、意味が同じでも、使い方が異なることがある」と指摘している。中国語とりたて表現の“只”は副詞としての機能を果たし、副詞の文法特徴に従っており、よく述語動詞の前に位置してその述語動詞を修飾するとされている。

副詞の下位分類から見ると、“只”は一般に範囲副詞として捉えられている。張誼生(2001)では、範囲副詞を「文中のある要素が述語に関係するときの範囲を限定する副詞である」と定義されている。

例文(2)におけるとりたて表現“只”を移動させ、文中の各成分に付加させると、以下の例文(6)(7)(8)となる。

- (6) ? 只 我 给 了 太郎 一百元 钱。
 (だけ 1SG あげる PST 太郎 100元 金)
- (6a) 只 有 我 给 了 太郎 一百元 钱。(主語をとりたてる)
 (だけ ある 1SG あげる PST 太郎 100元 金)
 「太郎に100元あげたのは私だけだ」
- (7) * 我 给 了 只 太郎 一百元 钱。(間接目的語をとりたてる)
 (1SG あげる PST だけ 太郎 100元 金)
- (8) ? 我 给 了 太郎 只 一百元 钱。(目的語をとりたてる)
 (1SG あげる PST 太郎 だけ 100元 金)

例文(6)では、とりたて表現“只”は主語の前に置かれ、主語“我”をとりたて、ほかの人を排除する同時に、お金を出す人として、主語“我”の唯一性が表現されている。しかし、この例文(6)は現代中国語の語感では、多少不自然に感じられる。仮に、文中におけるとりたて表現の“只”を、例文(6a)のように副詞“只有”に言い換えるなら、容認度が高くなり、非常に自然な文になる²。

例文(7)における“只”は間接目的語“太郎”の前に移動された。間接目的語の“太郎”をとりたてようとすると、非文になる。例文(8)の“只”は直接目的語“一百元钱”の前に付加され、目的語を際立たせてみようとしていると、自然な文ではない。例文(7)と例文(8)の自然な言い方はいずれも例文(2)のように、とりたて表現の“只”を述語動詞“给”の前に置いたものである。こうすれば、例文(2)は二つの意味機能を持つようになる。即ち、とりたて表現の“只”は目的語の“一百元钱”と間接目的語の“太郎”の両方とりたてることが可能なので、この文は曖昧文になる。

言い換えれば、中国語とりたて表現“只”の付加位置は相対的に固定的で、一般に述語

² 筆者は北京日本学研究中心が作成したパラレルコーパス「中日対訳コーパス」(CJCS)で、日本語の限定とりたて表現に対応する中国語表現を調べたことがある。そのうち、「だけ」に対応する中国語表現には、“只”だけではなく、“只是”“只要”“只有”などの副詞が多用されている(半数を超える)ことが分かった。その理由は、現代中国語ではリズム規則の影響で、単音節より二音節が好まれるからだと考えられる。

動詞の前に位置する。主語をとりたてる場合は“只有”のような二音節副詞が多用される。曖昧文に至った原因を考えると、言語類型論的特徴が挙げられる。

井戸美里(2021:98)では、「日本語のとりたてて表現はとりたてて助詞が主に用いられ、他言語と比べるととりたてて表現専用の形態の数が豊富である」と指摘している。日本語は典型的な SOV 語順言語であるのに対し、現代中国語標準語は全体的に見れば、SVO 語順言語に属する。ある言語が SOV 型語順を持つなら、その言語は後置詞を使うのが優勢語順であるとされている。日本語のとりたてて助詞「だけ」は助詞の機能に従い、名詞などの体言に後続するのが一般的である。とりたてられる名詞との関係からいえば、後置詞とも呼ばれるものがある。即ち、「だけ」の付加位置は言語類型論の優勢語順と合致すると判断できる。そのため、以上の例文における「だけ」のとりたてて対象は明確に表現でき、曖昧文にはならなかった。

一方、金立鑫(2011:80)によれば、SOV 言語における連用修飾成分がほとんど動詞か形容詞の前に位置するのに対し、SVO 言語の連用修飾成分は動詞か形容詞の後に位置するのが優勢的である。前述のとおり、“只”の付加位置は相対的で固定であり、動詞の前に位置するしかないので、SVO 型言語の優勢語順と一致しないと言える。したがって、言語類型論的な観点から説明すると、例文(2)における“只”の付加位置が SVO 型言語の優勢語順と一致しないことが、文の曖昧性をもたらしたと考えられる。

3. 共起関係と曖昧性

前節では「だけ」と“只”の付加位置からとりたてて表現の曖昧性を分析した。以下では視線を広げ、日中語の限定とりたてて表現の全体的な共起関係を対照しながら、各表現のとりたてられる要素を明らかにし、様々な要素と共起する時の曖昧性を考察してみる。

語と語の関係については、文中に出現するある語が他の語と位置関係が近く、かつ意味的関連度が高い場合には、この2つの語は共起関係にあると言える。共起関係は、語と語との自然な組み合わせであり、客観的に存在する言語現象である。とりたてて表現の共起関係はとりたてて表現ととりたてられる要素との相互作用によって現れる。

とりたてられる要素から見ると、日本語の限定とりたてて表現は名詞、名詞節、数量詞、動詞などをとりたてることができる。日本語記述文法研究会(編)(2009)では、個々の日本語とりたてて表現の様々なとりたてて要素が分析された。とりたてて助詞の「だけ」「しか」「ばかり」はよく様々な構成要素に後接し、「ただ」「単に」はとりたてて副詞で、とりたてられる要素の前に位置するのが一般的である。本節は日本語記述文法研究会(編)(2009)の研究を踏まえ、副詞と形容詞も入れ、日中とりたてて表現の共起関係を対照分析してみる。

種々の要素の中で、日本語のとりたてて助詞が最も共起しやすいのは名詞や名詞節である。特に格成分と共起する形式の使用頻度が非常に高い。このような形式では格助詞によって、

意味関係が明確に表記されるので、曖昧性が生じにくいのである。ただ、格成分をとりたてて場合、格助詞「ガ、ヲ」が現れないこともある。例えば、例文(9)(10)(11)における「だけ」「しか」「ばかり」は名詞か名詞節に接続し、とりたてた名詞の「桜」「名前」及び名詞句「自分のいいところ」と共起している。

(9) とにかく桜**だけ**は見よう。

(10) 名前**しか**教えようとしなない。

(11) 自分のいいところ**ばかり**見るタイプと、逆に欠点**ばかり**見るタイプに分かれる。

このうち、目的語についた「ヲ」が省略されたが、とりたて表現ととりたてられる要素との意味関係は緊密であると同時に、文法上の位置も隣接している。これは曖昧文にはならない原因なのではないかと考えられる。本稿はこの現象を意味接近法則で解釈する。意味接近法則では、「言語構成要素の形式的な結びつきと意味的な結びつきの間には、高い正の相関がある。意味的に近い成分は距離も近い」ということを述べている(陸丙甫 2020)。意味接近法則によると、文における二つか幾つかの構成要素は、意味上の関連が緊密であればあるほど、付加位置もそれにつれて接近してくる。そのため、名詞や名詞節をとりたてて時、格助詞が省略されることがあっても、日本語のとりたて表現は意味接近法則が適用され、曖昧性は生じない。

中国語には格助詞という文法構成要素はないため、とりたて表現は格助詞と共起しない。日本語のとりたて助詞はとりたてる要素に後接する。それに対し、日本語のとりたて副詞及び中国語のとりたて副詞はとりたてる要素の前に位置するのが一般的である。

(12) 川づくりというものは**ただ**技術で、おれ、知らなくてもいいんだ。

(13) 契約が**単**に法律の問題だけでない。

(14) 只/仅 一个人 选了 A。

(だけ/しか ひとり 選択 PST A)

「一人だけ A を選んだ」

(15) 班 里 光/净 男生, 一个 女孩子 也没有。

(クラス 中 だけ/ばかり 男の子 一人 女の子 も ない)

「クラスは男の子ばかりで、女の子は一人もいない」

例文(12)(13)における「ただ」「単に」はとりたて副詞で、とりたてられる名詞か名詞句

の前に置かれ、両語は「とりたて表現＋名詞」の形式で共起する。中国語例文(14)(15)も同様に、とりたて表現“只/仅”“光/净”が“一个人”“男生”の直前に位置するので意味は明確である。ただし、“只/仅”は前述の例文(2)のように、とりたてる名詞と隣接しない時は、曖昧性が生じやすい。“光/净”は意味上で複数性に着眼しており、とりたてる対象は“只/仅”ほど複雑でないゆえに、曖昧性が生じにくい。つまり、中国語の限定とりたて表現の“只/仅”はとりたてる名詞と隣接でない時には曖昧性が生じやすい。

以下は日中語のとりたて表現と数量詞との共起について考察する。日中語のとりたて表現には数量詞と共起できるものと共起できないものがある。日本語とりたて助詞の「だけ」「しか」は数量詞につくことができる。

(16) 疲れたから、10分**だけ**休憩しよう。(日本語記述文法研究会(編)2009:50)

(17) 参加者は10人**しか**いなかった。

(18) 自宅から大学まで2時間**ばかり**かかる。

例文(16)(17)における「だけ」「しか」は数量詞「10分」「10人」に接続し、休憩の時間と参加者の人数をきわだたせ、数量の範囲を限定するため、限定とりたて表現の用法に属する。しかし、例文(18)における「ばかり」は限定とりたて表現とは言えない。なぜなら、「2時間」についての「ばかり」は接尾辞で、おおよその数を表し、とりたての機能を持っていないからである。また、「ばかり」は数量詞と共起できない。

(19) **ただ/単**に一枚だけ現存している。

(20) 快递 **只/仅** 收到 3件。

(宅配便 **だけ/しか** 届く 3個)

「宅配便は3件**しか**届かなかった」

(21) 作品 **只/仅** 一周 **就** 完成 了。

(作品 **だけ/しか** 一週間 **CJP** 完成 **PST**)

「作品は**わず**か一週間**だけ**で完成した」

(21a) * 作品**光**一周**就**完成了。

(21b) * 作品**净**一周**就**完成了。

例文(19)のように、日本語とりたて副詞の「ただ/単に」は「とりたて副詞＋数量詞」の

形式である。例文(20)(21)では、中国語のとりたて副詞“只”“仅”も同様に、「とりたて副詞+数量詞」の形式でとりたて対象の数量詞を制限できる。ただ、(20)の“只/仅”は目的語“3件”をとりたて、述語動詞“收到”は「とりたて副詞+数量詞」の間に置かれているので、“只/仅”のとりたてる対象が“收到”なのか“3件”なのか分からなくなってしまう。そのため、例文(20)は曖昧文であることが判定できる。

一方、例文(21)におけるとりたて表現“只/仅”は数量詞“一周”と隣接するので、曖昧文ではない。仮に例文(21)の“只/仅”を“光/淨”に入れ替えると、(21a)(21b)のように、非文となる。“光/淨”は複数性に着眼するので、具体的な数量詞をとりたてることができない。

日本語の限定とりたて表現は副詞的な成分をとりたてることもできるとされている。たとえば「だけ」は事態の程度、頻度、様式などを制限しやすい。

(22) 彼の中の何かをすこし**だけ**変えた。

(23) たまに**しか**応接間に行かない。

(24) 黙々と仕事をする**ばかり**だ。

例文(22)の「だけ」は副詞「すこし」と共起し、事態の程度を限定する。例文(23)における「しか」は「たまに」と共起し、「副詞+とりたて助詞」という形式で、動作の頻度を限定してとりたてる。しかし、例文(24)は、「ばかり」の共起対象が副詞「黙々と」なのか、述語全体なのか分からないので、曖昧文であると言える。

(25) 三善は慎重に軽口は叩かず、**ただ**ゆっくり頷いた。

(26) 低 着 頭, 只/仅 匆匆 赶路。

(低く PROG 頭 ただ/ばかり 慌ただしい 急ぐ 道)

「下を向いて、ただ道を急ぐ」

(27) 满 大街 **光/淨是** 慌慌张张 躲雨 的人。

(いっぱい 街 ただ/ばかり 慌てて 雨宿りする の 人)

「街はあわてて雨宿りする人でいっぱいだ」

例文(25)~(27)は日中語における限定とりたて副詞の例で、上述のとりたて助詞との相違は、統語位置と限定の内容にある。副詞と共起する場合、とりたて副詞はとりたてる対象の前に位置し、「とりたて副詞+副詞+述語動詞」という形式が常用されている。限定の内容から言うと、副詞よりも、副詞を含む述語句を限定しやすい。たとえば例文(25)の「た

だ」は後接の「ゆっくり頷いた」をとりたて、例文(26)の“只/仅”は“匆匆赶路”をとりたてている。例文(27)の場合はほかのとりたて表現と違い、“光/浄”と共起するのは副詞の含む動詞句ではなく、名詞句である。“光/浄”と副詞との共起は「副詞＋動詞＋名詞」という形式に限られる。

限定とりたて表現がいずれも副詞と共起できることは上述の分析で明らかにしたが、すべての副詞と共起するというわけではない。コーパスで調べたところ、限定とりたて助詞またはとりたて副詞が副詞と共起する用例は少数で、しかも副詞の種類にも制限があり、「ゆっくり」「ちょっと」のような程度、頻度、様態にかかわる副詞に限られている。

曖昧性から分析すると、日本語のとりたて助詞は文に曖昧性をもたらしにくいのに対し、日本語のとりたて副詞と中国語のとりたて副詞は文に曖昧性を生じさせ得る。それは、とりたてられる対象が副詞か、副詞の含む述語句や名詞句かはっきりしていないからである。

動詞との共起について、日中語のとりたて表現のいずれも動詞と共起でき、ある範囲の中でその動作をとりたてて限定する。ただ、動詞と共起する「ばかり」は形式上に独特性があり、「動詞て＋ばかり＋いる」というような介入式が頻繁に利用されている。曖昧性から分析すると、単純動詞をとりたてる文は曖昧性を生じさせない。しかし、前述の名詞と副詞の例文のように、述語動詞の文中での現れはよく目的語名詞、連用修飾成分などを伴うゆえに、日中語の限定とりたて表現はいずれも曖昧文になる可能性があると言える。

形容詞との共起は「ただ」「だけ」に限られ、よく「ただ＋形容詞＋だけ」という形式で現れる。例えば、下例(28)の「寂しい」は「ただ」と「だけ」にとりたてられ、意味関係も明確である。コーパスによると、「だけ」より、「ただ」のほうが形容詞と共起しやすい。「ただ」「だけ」以外の表現は形容詞と共起せず、曖昧性も生じない。

(28) **ただ寂しいだけだ。**

以上の分析を通じて、とりたて表現ととりたてられる要素との位置関係が重要であることが分かった。とりたて助詞と比べて、とりたて副詞は副詞の構文特徴に従い、統語位置はあまり固定ではない。文脈によって、とりたてられる要素との距離が短いものもあれば長いものもある。たとえば、以下例文(29)の「単に」を移動させ、(29a)(29b)に変換する。変換された例文における「単に」は徐々にとりたてた要素の「三本半」に近づいていき、長距離から短距離に変わることができる。とりたて表現ととりたてられる要素との距離は短ければ短いほど、意味関係が明確になる。これも意味接近法則に該当すると考えられる。

(29) **単に**紙に線を三本半書くだけでもよかったそうである。

(29a) 紙に**単に**線を三本半書くだけでもよかったそうである。

(29b) 紙に線を単に三本半書くだけでもよかったそうである。

以上の分析から分かるように、日中語の限定とりたて表現はいずれも名詞や数量などの体言のとりたてから、行為など用言のとりたてまで拡張できる。両言語とも名詞・名詞句、動詞・動詞句及び連用成分と共起できる。それに加え、副詞と共起するときは両言語とも意味上の制限がある。

日本語の限定とりたて表現は格助詞に後続して格成分と共起でき、そうした場合での意味関係が明示されるので、曖昧性が生じにくい。それに対し、中国語には格助詞がないので、曖昧文になりやすい。特に“只”“仅”が目的語名詞や連用修飾成分における名詞をとりたてる時は曖昧文になり得る。

数量詞との共起について、日本語の「ばかり」及び中国語の“净”“光”は意味上の制限で数量詞と共起できない。ほかのとりたて表現では、いずれも曖昧性が生じない。形容詞との共起について、「だけ」と「ただ」は形容詞と共起でき、「ただ」が一番形容詞と共起しやすい。ほかの表現は形容詞と共起しにくく、曖昧性も生じない。

限定とりたて表現は副詞や動詞などを含む複雑な述語句と共起する場合、非常に曖昧性が生じやすいのである。

4. 焦点移動

4.1 焦点の性質と判断基準

付加位置と共起関係における特徴はとりたて表現の焦点に大きく関与している。とりたて表現の焦点は以上のような要因に影響され、分布は固定的ではなく、ある程度の移動性を示している。

焦点はフォーカス³とも呼ばれ、言語学研究において様々な定義がなされている。英語では普通、文強勢を焦点とする。焦点は文の中で新情報に相当する部分である。例えば、例文(29)の「10月に」をやや強調して発音すれば、この文の新情報は「10月に」で、「10月に」は焦点に当たる。残りの部分は、文脈や先行する会話などから、話し手及び聞き手がすでに了解していた情報を表している。なお、同じ文を「オンライン式」という部分にプロミネンスを付けるならば、「オンライン式」は新たな情報として伝えられ、焦点となる。

(30) 学会は10月に オンライン式 だけで 行われました。

³ 本稿は、焦点とフォーカスについて、名称が異なるだけで内容と性質は同様であると考え。

日本語とりたて表現の焦点について、沼田善子(2009:85)によると、「とりたての焦点とはとりたての作用域内にある要素で、文脈などの語用論的情報から、他との範列的な対立関係を集約的に表す要素ととらえられる構成素の範囲である。最大の焦点は、作用域と一致である」と指摘している。沼田善子(1986、2009)はとりたて助詞の作用域を「直前焦点」「後方移動焦点」「前方移動焦点」の三つの種類に分けている。

一方、中国語における関連研究は主に意味指向に集中しており、呂叔湘(1979)、陸検明(1997)などがある。意味指向とは文中のある要素が意味上において、文中のどの要素と最も直接的関係するかということである。当該の意味指向は日本語の焦点に対応すると本稿は考える。

徐烈炯・劉丹青(2018:81)では、「焦点は語用論的で機能的な概念で、話し手が聞き手に特に伝達したい部分で、焦点は自然焦点と対比焦点に分けられる」と述べている。呉衛平(2014:19)では焦点判定について、三つの基準が設定された。①新情報を担う要素。②文中である作用を受け取る部分、あるいは最も重要な情報を担う要素であるもの。③普通文強勢で表すが、特定の形態素、統語的構造によっても表され得る。

以上の先行研究を踏まえ、本稿はとりたて表現によってとりたてる新情報を焦点とし、焦点と同じ範列関係にある要素を背景とする。以下は日本語と中国語の限定とりたて表現の焦点移動を論じる。

4.2 日本語限定とりたて表現の焦点移動

日本語とりたて助詞の焦点移動に関する研究はよく「だけ」「しか」「ばかり」を巡って論述している。沼田善子(2009)の研究では、とりたて表現と焦点との関係によって、とりたて表現の作用域が三つのタイプに分類できると明らかにした。「直前焦点」とはとりたて表現の直前、あるいは格助詞を介入して直前の要素が焦点となるものである。「後方移動焦点」とは文中の名詞句などに後接するとりたて表現が、その名詞句から述語までの範囲、つまり、述語句を焦点とするものである。「前方移動焦点」とはとりたて表現が述語に後接するにもかかわらず、述語と離れて、焦点はその述語と共起する前方の名詞句などであるものをいう。呉衛平(2014:158)は、「だけ」には三種類の焦点が存在し、「しか」には二種類の焦点が存在すると指摘している。本稿は沼田善子(2009)と呉衛平(2014)の基準に従い、日本語と中国語のとりたて副詞をも入れ、限定とりたて表現の全体的な焦点移動を明らかにしたい。

(31) 一見 だけ ではちょっとわからない。(直前焦点)

(32) 忘年会には、お酒 しか 飲まない 人もいるし、おやつ しか 食べない 人もいる。

(後方移動焦点)

- (33) A社の人に謝ってばかりいる、B社の人に謝らない。(前方移動焦点)
(34) 溜息ばかりついている。(後方移動焦点)
(35) 人の悪口を言うばかりだ。(直前焦点)

たとえば、例文(31)における「だけ」のとりたてる要素は直前に位置する「一見」で、即ち、この文における「だけ」の作用域は「直前焦点」で、例文(35)も同様である。「直前焦点」は最もよく見られる種類である。「しか」は一般に直前の要素をとりたてる。たとえば、例文(32)における「お酒しか飲まない」が単独で現れると、焦点は直前の「お酒」である。単文とは異なり、(32)のような複文では、二つの「しか」のとりたてる要素はそれぞれ前方の名詞句「お酒」+後方の述語成分「飲まない」と「おやつ」+「食べない」である。つまり、この文における「しか」の焦点は二つの部分から組み合わせてできた述語句といえる。この場合では、「しか」の焦点は「後方移動焦点」である。つまり、「しか」の焦点は「直前焦点」と「後方移動焦点」という二種類がある。例文(33)における「ばかり」は述語の「謝る」に後続するにもかかわらず、焦点が述語と共起する「A社の人」なので、この「ばかり」の焦点は「前方移動焦点」であると言える。しかし、例文(33)は文の後半における「B社の人」を通して「A社の人」という焦点がとりたてられたのである。仮に後半の部分がなければ、曖昧性が生じる。例文(34)も同様に、「ばかり」の焦点は「後方移動焦点」で、この文脈では、焦点が「溜息」なのか、「溜息をついている」なのか分からないので、曖昧文である。

以下は日本語とりたて副詞の焦点について考察する。本稿では、先行研究の指摘を踏まえ、「直後焦点」「文全体焦点」も含めて考察する。

- (36) ただ一時期、自分の提案による子会社設立が失敗した。(直後焦点)
(37) 文章をただ読んでいるだけなのかな。私にはいいかげんな答弁はできないのですよ。
(後方移動焦点)
(38) A: なにも食べなかったね。どうしたの。
B: ただ食欲がないんだ。どんなご馳走を前にしようと食べる気がしない。
(文全体焦点)

例文(36)を観察すると、「ただ」のとりたてた焦点は「ただ」の直後に位置しており、このような焦点特徴は「直後焦点」と呼ばれる。つまり、とりたて表現の直後の要素が焦点となるものである。例文(37)の焦点は「後方移動焦点」であると判定できるが、「ただ」が際立たせているのが前方の「文章」なのか、後方の「読んでいる」なのか、はたまた「文章を読んでいる」なのか明確でないので、この文は曖昧文である。

例文(38)は解釈性をもつ「ただ」の用例で、「ただ」を含めた文全体が解釈の機能を担うので、このような焦点は「文全体焦点」と呼ぶ。つまり、とりたて表現の含む文全体が焦点となるものである。文全体で解釈の意味を機能させており、文が分裂すると、解釈の機能が働かないので、分けても複数の焦点にはなれない。したがって、「文全体焦点」の場合では曖昧性が生じない。

「単に」は「ただ」と意味上ではやや相違点を有するが、形式上の共起関係はほぼ同様である。それゆえ、「単に」の焦点も「ただ」と同じで、「直後焦点」「後方移動焦点」「文全体焦点」という三つのタイプがある。

4.3 中国語限定とりたて表現の焦点移動

呉衛平(2014)は“只”“净”の焦点について研究し、両語とも「直後焦点」と「後方移動焦点」の二種類が現れると指摘している。前述の形式からわかるように、中国語のとりたて副詞はいずれもとりたてる要素の前方に位置し、即ち、焦点はとりたて副詞の後方に置かれると決まっている。それゆえ、「直前焦点」と「前方移動焦点」はないと想定できる。本稿は呉衛平(2014)の研究をさらに進めていき、「直後焦点」「後方移動焦点」「文全体焦点」の三つのタイプから、中国語とりたて副詞“只”“仅”“光”“净”の焦点移動について考察する。

(39) 只/仅/光 英语作业 这一项 就 要 做 半天。(直後焦点)
 (だけ/しか/ばかり 英語の宿題 この項目 CJP 必要 やる 半日)
 「英語の宿題だけで、半日もかかる」

(40) 桌子上 净/光是 垃圾。(直後焦点)
 (机の上 しか/ばかり ごみ)
 「机の上はごみばかりだ」

例文(39)の焦点は“英语作业这一项”(英語の宿題これ一つの項目)で、(40)の焦点は“垃圾”である。この二つの焦点はとりたて表現“只”“仅”“光”“净”の直後に位置するので、「直後焦点」と判断でき、焦点が明確で曖昧文になりえない。

(41) 只/净/光 批评 下属。(後方移動焦点)
 (だけ/しか/ばかり 批判 部下)
 「部下だけ批判する」

(41a) 只/净/光 批评 下属, 不 自我 批评。
 (だけ/しか/ばかり 批判 部下 NEG 自己 批判)
 「部下だけ批判していて、自己批判をしない」

(41b) 只/净/光 批评 下属、 从来 不 表扬。
 (だけ/しか/ばかり 批判 部下 従来 NEG ほめる)
 「部下を批判するだけで、ほめない」

(42) 这个月 的 任务 只/仅 完成 一个。(後方移動焦点)
 (今月 の 任務 だけ/しか 果たす 1つ)
 「今月の任務は1つしか果たせなかった」

例文(41)(42)の焦点はとりたて表現と離れ、述語動詞の後についているので「後方移動焦点」として捉える。このような場合では「前方移動焦点」と同じように、曖昧性が生じえる。たとえば、例文(41)は(41a)とも(41b)とも解釈でき、焦点が“下属”か“批评”かによって意味が異なる。

(43) 只/只是/仅仅 碰巧 在 路上 见 过 几次 面。(文全体焦点)
 (だけ/ただ/単に たまたま LOC 道 会う PST 何度か 会面)
 「たまたま道で何度か会っただけだ」

(43a) A: 两位 是 熟人 吗?
 (お二人 は 知り合い 疑問詞)
 「お二人は知り合いですか」

B: 没有没有。 只是 碰巧 在 路上 见 过 几次 面。
 (いえいえ ただ たまたま LOC 道 会う PST 何度か 会面)
 「いえいえ。ただたまたま道で何回か会っただけです」

例文(43)の焦点は一見判断しにくい、それを例文(43a)のように補足して会話文にすると、Bさんの話はAの発話に対する応答となる。そのため、このとりたて表現の焦点は文全体であることが分かった。文脈を通し、とりたて表現の含む文全体で事情を解釈することから、とりたて表現の文全体焦点が判断でき、曖昧性もない。

以上の分析を表1でまとめる。

[表1] 日中語の限定とりたて表現の焦点移動

焦点移動 とりたて表現		直前 焦点	前方移 動焦点	後方移 動焦点	直後 焦点	文全体 焦点
		日本語	だけ	○	○	○
とりたて 助詞	しか	○	×	○	×	×
	ばかり	○	○	○	×	×
日本語とり たて副詞	ただ	×	×	○	○	○
	単に	×	×	○	○	○
中国語 とりたて 副詞	只	×	×	○	○	○ ⁴
	仅	×	×	○	○	○ ⁵
	光	×	×	○	○	×
	净	×	×	○	○	×

(○可能 ×不可能)

日本語とりたて助詞の焦点は前方に位置するので、「直前焦点」と「前方移動焦点」は可能である。日本語のとりたて副詞と中国語のとりたて副詞は焦点の前に現れるので、「直前焦点」の代わりに、「後方移動焦点」か「直後焦点」が一般的である。日本語の「ただ」「単に」と中国語の“只”“仅”は文全体焦点の特徴を持っている。曖昧性からいえば、中国語も日本語も焦点が「前方移動焦点」や「後方移動焦点」のような移動性のある焦点であれば、曖昧文になる可能性も生じる。

5. とりたて表現の曖昧性解消

5.1 プロミネンス

焦点は普通、話言葉ではプロミネンスという音声的な手段で表され、書き言葉では語順、助詞等統語論的な手段で表現される。窪菌晴夫(2021:2)は、言語類型論の観点から、プロミネンス(卓立)を音声的にどのように具現するかについて言及している。日本語のプロミネンスは曖昧性と密接に関連していない一方、中国語のプロミネンスは話し言葉で焦点を表記する機能を持っている。

⁴ “只是” “只不过” のような“只”の拡張形式が多用される。

⁵ “仅仅” “仅是” のような“仅”の拡張形式が多用される。

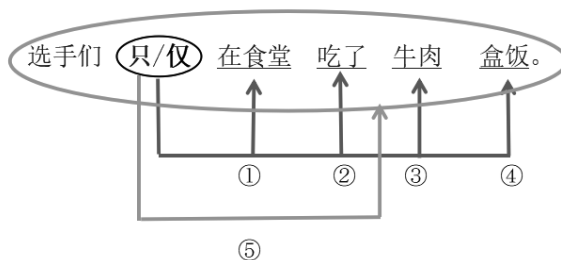
- (44) 我 只 给 了 太郎 一百元 钱。(例文(2)の再掲)
 (1SG だけ あげる PST 太郎 100 元 金)
 「私は太郎に100元だけあげた」

例文(44)では、プロミネンスにより、曖昧性が解消されている。“太郎”にプロミネンスを付けると、“太郎”が際立たせられて焦点となり、同様に“一百元钱”にプロミネンスを付けると、“一百元钱”が音声手段で際立たせられ焦点となる。

5.2 対比焦点

書き言葉では、焦点の判定が文脈に対する依存が高いのは上述で分かった。文脈のもたらず情報が完全でなければ、焦点も判断しにくくなる。即ち、焦点不明で文に曖昧性が生じる。前述の内容によると、日本語も中国語も場合によってはとりたて表現の曖昧文になるが、日本語より、中国語のほうが曖昧性が生じやすいので、以下は中国語の複雑述語文を例にして分析する。例えば、以下の(45)の“只/仅”はどの要素をとりたてているか明確ではない。なぜなら、“只/仅”の後方にあるどの要素も焦点になる可能性があるのである。

- (45) 选手们 只/仅 在 食堂 吃 了 牛肉 盒饭。
 (選手たち だけ/ただ LOC 食堂 食べる PST 牛肉 弁当)



【図1】 中国語とりたて副詞の曖昧性表現

前述したように、中国語の話し言葉では、プロミネンスを利用して文の焦点を表すことによって曖昧性を解消できる。例えば、“在食堂”にプロミネンスを付けると、“在食堂”が焦点となり、“只/仅”の焦点は直後にあると判断できる(焦点①で表示)。同じように、プロミネンスを次々と“吃了”“牛肉”“盒饭”に移動させるにつれ、焦点も次々と焦点②、焦点③、焦点④に移動する。「③+④」「②+③+④」も焦点となる可能性はあるが、ここでは論じないことにする。

書き言葉では対比焦点⁶を利用して曖昧解消を行うことができる。以下では、とりたて要素と同範列で、排除された要素を補足する方法で焦点を明確にしてみる。

焦点① 选手们只/仅在食堂吃了牛肉盒饭，没在酒店吃。（直後焦点）

「選手たちは食堂だけで牛肉弁当を食べ、ホテルでは食べなかった」

焦点② 选手们只/仅在食堂吃了牛肉盒饭，没有买。（後方移動焦点）

「選手たちは食堂で牛肉弁当を食べはしたが、買わなかった」

焦点③ 选手们只/仅在食堂吃了牛肉盒饭，没吃鸡肉盒饭。（後方移動焦点）

「選手たちは食堂で牛肉の弁当だけ食べ、鶏肉の弁当は食べなかった」

焦点④ 选手们只/仅在食堂吃了牛肉盒饭，没吃牛肉披萨。（後方移動焦点）

「選手たちは食堂で牛肉の弁当だけ食べ、牛肉のピザは食べなかった」

焦点⑤ A: 比赛期间选手们不能外出。

「試合中、選手たちは外出してはいけませんよ」

B: 选手们只(是)/只不过/仅仅在食堂吃了(个)牛肉盒饭(而已)。

(文全体焦点)

「選手たちはただ食堂で牛肉弁当を食べただけです」

例えば、焦点①の場合、“在食堂”と同範列にある要素の一つとして、“在酒店”が補足され、二つの要素は文脈によって対比され、排除されなかった“在食堂”が焦点となる。焦点②、③、④も同様に対比焦点を通して曖昧性を解消でき、後方移動焦点であると判断できる。焦点⑤の場合では、前述の解釈性のある文と同じく、“只/仅”の焦点は文全体焦点である。

また、例文(45)における“了”を削除すると、“光/净”もこの曖昧文に適応し、“选手们光/净在食堂吃盒饭”となる。意味上では解釈性ではなく、複数性に着眼するので、「焦点⑤」のような文全体焦点も同時に消えてしまう。「文全体焦点」を除き、“光/净”の曖昧性及びその解消方法は“只/仅”の「焦点①」から「焦点④」までと全く同様で、ここでは一々論じないことにする。

6. まとめ

本稿は日中語の限定とりたて表現の曖昧性と焦点移動に関連する要素を分析し、両言語の曖昧性における共通点と相違点を明らかにした。そのうえで、曖昧性の生じた原因と解消方法を解明した。詳細は以下の表2でまとめる。

⁶ 対比焦点(contrastive focus)とは、一方を強調するためにもう一方を否定し、対比を通して焦点を明示するものである。対比項は文脈又は共通知識として存在するわけである(徐烈炯・劉丹青(2018:83))。

[表 2] 日中語の限定とりたて表現の曖昧性関連要素の対照

	日本語	中国語
付加位置	相対的自由で移動できる； SOV の優勢語順に合致するとりたて助詞が多いので、曖昧性が生じにくい。	相対的固定で移動できない； SVO の優勢語順と一致しないとりたて副詞が中心なので、曖昧性が生じやすい。
共起関係	格助詞及び形容詞と共起でき、それに曖昧性が生じない； 複雑な成分と共起する場合、意味接近法則に該当する形式が観察されているので、曖昧性をもたらした共起形式は多くない。	格助詞と共起できない且つ名詞と共起するときは曖昧性があり得る； 複雑な成分と共起する場合、とりたてられる各要素との関係が複雑なので、曖昧性が生じやすい共起形式が多い。
焦点移動	助詞で焦点表記できる； 移動性のない「直前焦点」が主に機能しており、曖昧性が生じにくい。	書き言葉では焦点表記がなく、文脈によって焦点不明になる可能性が高い； 「直後焦点」と「後方移動焦点」が一般的で、移動性も高いので、曖昧性が生じやすい。
曖昧性解消	対比焦点で曖昧性を解消できる； プロミネンスに依存しない。	対比焦点で曖昧性を解消できる； プロミネンスで曖昧性を解消できる。

総じていえば、日中語の限定とりたて表現はいずれも曖昧性の特徴を持っているが、日本語より、中国語のほうは曖昧性を生じさせやすい。その基礎的な原因はとりたて助詞の有無にある。日本語のとりたて表現がとりたて助詞ととりたて副詞からなるのとは違い、中国語とりたて表現は副詞がその機能を果たしているので、上述の異同が生じた。

付加位置における異同は類型論的な特徴に深く関わっている。日本語は典型的な SOV 語順言語であるのに対し、現代中国語標準語は全体的に見れば、SVO 語順言語に属する。SOV 型語順は後置詞を使うのが優勢語順で、「だけ」のようなとりたて助詞の付加位置は言語類型論の優勢語順と一致するゆえに、曖昧性が生じない。SVO 言語の連用修飾成分は動詞か形容詞の後に位置するのが優勢的であるが、“只”のようなとりたて副詞の付加位置は相対的固定で、普通、動詞の前に位置するしかない。SVO 型言語の優勢語順ではないので、曖昧性などの問題をもたらしやすい。

日本語においても中国語においても限定とりたて表現は副詞や複雑な動詞述語句と共起する場合、非常に曖昧性が生じやすい。それは意味接近法則に関連すると考えられる。とりたてる要素と隣接する場合は差支えないが、述語成分が複雑であればあるほど、とりたて表現ととりたてる要素との距離が長くなる可能性が高くなる。それに伴い、曖昧文の種類も多くなる。

焦点の側面も付加位置と共起関係に大きく関与され、移動性のある種類には曖昧性が生じる。曖昧性解消について、書き言葉では両言語とも対比焦点で曖昧性が解消される。一方、話言葉では、日本語はプロミネンスに依存しないのに対し、中国語の話し言葉ではプロミネンスによって曖昧性が解消される。

日中語の限定とりたて表現の曖昧性と焦点移動について、本稿は各レベルで論じたが、焦点を判断する基準など未だ明確に論断できないものは多い。とりたての視点などこの他にも解決すべき点は多いが、今後の課題としたい。

言語資料

本稿の例文は、分析を容易にするために先行研究から引用または筆者が作成したものを除き、BCC・BCCWJ・CJCSから引用したものである。

略語

1SG	1人称単数
CJP	接続助詞
LOC	場所格
NEG	否定
PROG	継続相
PST	過去

参考文献

日本語で書かれた参考文献

- 井戸美里 (2021) 「日本語のとりたて表現と言語類型論」 窪菌晴夫・野田尚史・プラシャントパルデシ・松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』 開拓社.98-124.
- 井上優 (2019) 「中国語のとりたて表現」 野田尚史 (編) 『日本語と世界の言語のとりたて表現』 くろしお出版.111-128.
- 窪菌晴夫 (2021) 「日本語のアクセントと言語類型論」 窪菌晴夫、野田尚史、プラシャントパルデシ、松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』 開拓社.2-20.
- 呉衛平 (2014) 『日本語とりたて助詞と中国語焦点副詞の対照言語学研究』 南开大学出版社.19-158.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法 5』 くろしお出版. 3-71.
- 沼田善子 (1986) 「とりたて詞」 奥津雄一郎・沼田善子・杉本武 (著) 「とりたて詞」 『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社. 36-43.

沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』 ひつじ書房. 193-246.

中国語で書かれた参考文献

金立鑫 (2011) 『什么是语言类型学』 (言語類型論とは何か) 上海外语教育出版社.81-83.

叙烈炯・劉丹青 (2018) 『话题的结构与功能』 (話題の構造と機能) 上海教育出版社.81-87.

張誼生 (2001) 「论现代汉语的范围副词」 (現代中国語の範圍副詞研究) 『上海师范大学学报』 .107-113.

陸儉明 (1997) 「关于语义指向分析」 (意味指向の分析について) 『中国语言学论丛』 (第一辑) 北京语言文化大学出版社.34-48.

陸丙甫 (2020) 「距离象似性 — 句法结构最基本的性质」 (距離の類似性 — 文構造の最も基本的な性質) 『中国语文』 .642-766.

呂叔湘 (1979) 『汉语语法分析问题』 (中国語文法問題分析) 商务印书馆.35-36.